

古典の授業で何を教えるか

——生徒の実態に即して——

長 野 和 範

一、はじめに

私が、川崎にある新設間もない全日制普通科の現任校に移ってから二年が過ぎた。前任校は定時制であったが、そこでの三年間は、教科指導以前の生活指導（教科書を持って来させる、ノートをとらせる等）に追われていた。最近の定時制は、勤労学生や苦学生イメージからは程遠い、全日制からのドロップアウト組も多く、ただ「高校卒業」の資格を取りに来るためだけの学習意欲の欠如した生徒達（基礎学力の不足にもよるが）が大部分を占めている。

それに対して現任校は、一応全日制普通科高校であり、当初は教科指導の面に大いに期待を持っていた。しかし、現実には程度の差こそあれ、生徒の状況は定時制と類似していることに気がついていた。それは、簡単に言えば彼らが受験とはあまり縁ないことであり、そのために学習に対する自発性が見られないことである。このような現場が、高校の進学率が九割を超えた現在、増え

つつあることは確かである。このような生徒を相手にして、教科指導の面での苦労や悩みは尽きないが、逆に授業を通して彼らから教えられたことも多い。例えば、最近になって、いままで私は生徒の現象面だけを見て「学習意欲がない」と決めつけてはいなかったかと考えるようになった。そして現在では、本校の生徒達が自発的に勉強をしないのは、ある面では当然ではないかと思うようになった。それは、彼らに基礎学力がないことにもよるが、それ以上に彼らには明確な目標（「受験」などの）が見られないために、学習の必要性が感じられないからである。そのような中で、彼らは「何のために学習するのか」という素朴な問いかけを教師に対して様々な形で発しているのであるが、教師側がその問いかけに気がつかないで、明確な答えを示していないのが現実だと言える。これは彼らにとっては不幸なことである。

つまり、本校のように「受験」を前面に押し出せない現場においては、教師は常に「教科を通して何を教えるか」また「何を教えるのか」という本質的な問題に直面していることになり、換

言すれば、絶えず教師の教育観が問われているわけである。そして、極端に言えば、一人一人の教師は「何を教えるのか」という問題を解決しなくては教壇には立てないことになる。それに対して、「そのようなことは教師にとってあたり前だ」と言われる方も多いだろう。が、果してそうか。教師はともすれば、「自分は教科で何を教えるのか」という基本的な自己への問いかけを忘れていたのでないか。(それ以前に、自己の中にこれを「教えたい」という内的欲求を持っていない教師が多い。)

特に進学校と称される学校では、生徒はよく勉強する。それは目の前に受験が控えているからにすぎないと思うが。このような現場では、生徒からの「何のために学習するのか」という問いかけは見えにくくなっており、教師も「何を教えるか」ということを考えずに済まされる。ここでは、むしろいかに教えるかに関心が移っているようだが、教師も生徒も受験体制の中に埋没して、本質的な問題を見失なっているはいやしないだろうか。(私は、教師は「いかに教えるか」を考える以上に、もっと「何を教えるか」を考えるべきだと思っている。「何を」考える中で「いかに」という問題は解決できるはずである。)

さて、現在では高い進学率(ほぼ全入に近い)に伴う生徒の多様化によって、このように「受験」を前面に押し出して教科指導ができる所謂進学校は極少数になっている。したがって、多くの生徒は「受験」から無縁の所に存在していることを認識しなければならぬ。ここでは、「受験」という言葉が、もはや水戸黄門の「葵の紋の印籠」のような役目をしないのである。だから教師

は、当然のこととしてそのような生徒を前に「何を教えるのか」「何を教えうるのか」ということを考えざるを得ない。そのためには、教師が生徒に目を向け、生徒の置かれている状況や抱えている問題を理解することが非常に重要になってくる。

ところで、「国語」という教科においては、「現国」以上に「古典」の授業で多くの教師が苦勞をしていることと思われる。すでに、本誌においても、「生徒が興味深く取り組まない」等古典教育における問題については、奥津春雄先生が指摘されている。そして、生徒の実態を考えた場合、「受験」という枠はずして、「古典」という科目で「何を教えるのか」「何を教えうるのか」ということが実に大きな問題となってくる。

ここでは、本校の生徒の実態とそこで実際にどのような授業が行なわれているのかを紹介しながら、この問題について考えていきたい。

二、本校の実状と生徒の実態

本校は、一九七九年に創立された所謂新設校で、今春やっと三期生を卒業させた。神奈川県では、人口の急増と進学率の上昇に伴い、高校の絶対数が不足し、一九七三年以来八十八校の全日制普通科の県立高校が新設された。そして、県の目標はあと三年でこれを百校にすることであり、最近では「ポスト百校」計画も話題となっている。(一九八四年四月現在県立の普通科高校の数は約一二〇校である。)このような学校増設や学区縮小などにより学校間格差の解消を目指しながらも、中学校での進路指導では

「輪切り」が行なわれており、格差は厳然として存在する。その頂点に位置するのが有名私立高（県立高はやや地盤沈下気味）であり、底辺を支えるのが職業高校や定時制であり、そのやや上位に位置するのが多くの新設校だと言えよう。さらに、高校進学率の上昇により、目的もなく「ただ何となく」または「仕方なく」高校に入学して来る生徒がかなりの割合を占めるようになった。

当然のことながら、このような生徒に学習意欲や知的好奇心を期待できる筈がなからう。そして、これらの生徒を相手にして、各校では教科指導以前に生活指導の面での様々な問題を抱えているのが実状で、その中で教師達は、教科指導の面でも悪戦苦闘をしている。次に、本校の状況は多くの高校（特に新設校）に共通する問題を示していると思われるので、やや具体的に述べてみたい。

第一に大規模校であること。その多くが、一学年十二クラスの計三十六クラスである。本校は、58年度は二、三年が各十クラスであったので計三十二クラスであった。60年度から三十六クラスになるが、すると生徒数が一六〇〇名を超える。したがって、生徒と教師のコミュニケーションが疎になる。まず生徒の顔と名前が一致しない。（私は一学年だけ六クラスを教えていたが、それも学年の半分にすぎない。）

第二に教師側の問題。まず人数が多い。本校では七〇名近く（国語科だけで十一名）教師間の意志疎通が難しい（さらにカリキュラムが複雑で打ち合わせが持てない）。その上経験者が非常に少ない。本校では、教師の平均年齢が二九・三才と非常に若い。

三十代ですでに「ベテラン」と称される。毎年新任者は多いが、大部分が新卒者と中学校経験者である。経験者は新設校を希望しない。教師が若いということは、生徒に親近感をもちたらず、情熱がある等のプラス面も考えられるが、経験不足から生ずる問題も大きいと言える。特に教科指導の面では深刻な問題ではないか。例えば、生徒の実態を把握して、年間（さらには三年間）の見通しを持った教科指導を行なうことは、自分の教育観がまだ確立していない若い教師には難しいだろう。また多くを期待するのは酷である。（自分の高校時代に比べて、生徒の実態が大きく変化していることにまず驚かされるようだ。）しかし、これは生徒側にとっても不幸なことだと言えないだろうか。

第三に生徒の問題。生活面では、よく言われることだが基本的な生活習慣が確立していない。教師は服装や頭髪、遅刻、授業の無断欠課などの指導に毎日追われている。さらに、最近では学校不適応児も目立ち始めた。

学習面では、まず基礎学力の不足が挙げられる。これは入学当初から顕著である。本校生の学力を知る手がかりとして、県下一斉（年二回実施）の結果を見てみると、各教科とも当然のことだが県平均よりかなり低い。特に英数が重傷である。国語では、58年度の一年生で見ると、四月は五四・七点（県平均六一・二。一四六校中一〇六位）だが、十一月は四六・四点（県平均五六・三。一二八校中一〇二位）とやや県平均との差が広がっている。さらに二年になると、この差は一層広がる。（数学では、本校の平均は一〇点位になってしまふ。）十一月のテストの得点分布を

見ると、県全体では五〇点以上が六六・三%だが、本校では、三〇〜五九点の間に八割が集中しており、学力的に均質集団であることを示している。(中学校の進路指導の見事さに驚嘆するばかりである。)特に、漢字の読み書きの力が驚く程低く、授業で本文を音読させると漢字の所でつかえる。そのため授業では、ふり仮名をふらせる所から指導が始まる。

この基礎学力の不足に、学習意欲の低さと目的意識の欠如が加わり、状況はより深刻になる。生徒を見てみると、自発的に勉強をしない。それ以前に勉強の仕方がわからないとも言える。テスト前には何とか勉強をするが、日頃は家庭で勉強をする習慣がないから、知識の定着や蓄積がない。したがって先へ進めない。教科指導の上でこれが大きな障害となる。家庭での学習時間は、全校では一時間未満の者が六割強(うち半数が全くしない。)を占め、予習を望むべくもない。せめて復習を、と呼びかけているのが現実だ。

最後に進路について述べておくと、進学者は四年制大学、短大各一割という状況である。しかも大半が推薦である。学校内の高成績と実力とのギャップが大きく、受験では受からないのが現実。このことから、彼らがいかに「受験」から無縁であるかわかる。彼らの大きな目標は「高校卒業」自体であるのだから当然かもしれない。

三、具体的な授業の展開

57年度(二年生)と58年度(一年生)の二年間の授業の内容に

ついて述べてみる。各年度の教材と時間数は表に示した通りである。本校では、各学年共通テストを実施しているため、教材や進度はほぼ学年統一である。この点には大きな問題があると思う。また、表を見て、一年間でこれだけの教材しか教えられないのかもしれないが、これで精一杯なのが実状である。尚、使用教科書は、57年度は、角川書店の「古文」(I)(II)と大修館の「高等漢文」(B)(下)、58年度は、東京書籍の「国語I」である。

(一) 57年度(二年生—旧課程)の実践

「古典」は三単位(古文二時間、漢文一時間に分ける。)

1 学 期 (28)		古 文	漢 文
(9)	。九十二段「ある人、弓射ることを習ふに」 。百三十七段「花は盛りに」	「徒然草」。文学史的説明・兼好について。 。序段「つれづれなるままに」 。十五段「いづくにもあれ」 。三十二段「九月二十日のころ」	「臥薪嘗胆」(十八史略)
(4)			「鶏口牛後」(十八史略)

3 学 期 (18)	2 学 期 (26)	
<p>「方丈記」。「ゆく川の流れ」 (12)。「安元の大火」 。「閑居の気味」 。時代背景につ て。</p>	<p>「土佐日 記」 (5)。「門出」 。「忘れ貝」</p> <p>(4) 山上憶良 。大伴家持 。東歌・防人歌 。文学史的説明。 (日記について)。 「短歌 6」</p>	<p>「万葉集」。文学史的説明。時 代区分。</p> <p>(9) 額田王、天武天皇 。有馬皇子 。柿本人麻呂 。大伴旅人 「短歌 6、長歌 1」</p>
<p>(6) 「史記」より 。「鴻門之会」 。「沛公且日従百餘騎」 から樊噲が登場する 場面まで。</p>	<p>(5) 先哲の思想 。「論語」より五編 。「孟子」より一編</p> <p>(3) 「論語」より一編 。「老子」より三編</p>	

注、() は時間数。

この学年は、一年時に、古文では「平家物語」より一編、「古今集」、「伊勢物語」より三、四編。漢文では、入門教材（格言と故事）、唐詩（絶句と律詩）数編を学んでいる。文法では、用言

の活用と係り結びが中心であった。

この年は、本校に着任した年で、まだ生徒の実態を十分に把握できず、今振り返ると反省点が多い。また、教材や指導内容は先任の教師にできるだけ合わせるようにした。

さて、具体的な授業の様子だが、授業に意欲的に取り組んでいる生徒がクラスの中で四、五人という淋しい状況。最初から「古典」に対して興味を持たない生徒も多い。しかも、一年時で学習した事項を理解していない様子。そして、当然のことながら、予習、復習もあまり期待できそうもない。極端な例では、教科書を聞かない、ノートをとらない生徒もいる。私自身、予習についての指導として最低限ノートに本文を写す、本文に目を通して、ことを生徒に課したつもりであったが、徹底させることはできなかった。したがって、生徒達の授業の作業は、まず黒板に書かれたことをノートに写す、次に教師の言う通釈を、一字一句誤らずに書き写すことの二つに限定される。だから、通釈を繰り返す時に別の語句を用いると非難が集中した。また、通釈の時になると今までざわついていた教室が静まり返る。これには実に驚いた。つまり、生徒達は全く作品を、それ以前に文を自発的に読んでいないわけであり、授業中に自分の頭で考えていないことになる。一年生の時点で、すでに「古典嫌い」が定着していたわけである。

これらのことは、私にいくつかのことを教えてくれた。それは生徒にとって授業がすべてであることと、生徒はまがりなりにも「わかりたい」と思っていることである。通釈を写すのは、テストに出るからであり、彼らのよい点数への憧れがそこに見られ

る。自己防衛手段とも言える。(他に勉強の仕方を知らないし、授業は聞いていても理解できないから。)そこで授業では、前回の重要項目を整理確認することから始める。反復は非常に重要だと思ふ。そして、最初にその時間で学習するポイントを示す。

(教師が予め整理しておく。一回に二、三つが限度だと思ふ。)

また、大胆な取捨選択が必要だと思ふ。)さらに、授業の最後にまた確認をして、念を押してやる必要がある。とにかく、生徒が「わかる授業」を行ない、「わかる喜び」を与えてくれることを教師に要求していることがよくわかった。それから、一年時の指導が生徒にとって非常に大きな意味をもっていることに再認識させられた。

二年では、文法事項では、助動詞と敬語が中心になったが、結局は、助動詞の意味・活用・接続を暗記させることが指導の中心になってしまった。さらに、教師としては「徒然草」や「方丈記」の冒頭部分ぐらいは暗記させたいものらしく、小テストなど課し暗記するように指導をした。しかし、教師が躍起になったにもかかわらず、定期テストの出来で見る限り生徒には定着していなかった。私はそれは当然のことであろうと思ふ。それは、生徒側にしてみれば、一部の者を除けば、暗記をする必要性が感じられないからであろう。そこにあるのは、教師側からの「大切だから覚えておけ」式の強制があるだけにすぎない。全く生徒の自発性は存在しない。そして「何故大切なのか」あまり説明はなされない。確かに助動詞が理解できれば、作品を解釈する上でそれは大きな武器となることは明らかである。それは、理解するにこした

ことはない。しかし、暗記の強制がそれ以前に生徒の授業に対する興味と意欲を喪失させていくことに教師は全く気づいていない。いや、気づいていても「文法は教えるのは難しいから」と自己弁解をするのがいいところだろう。

私はここであえて「何故古典文法を教える必要があるのか」と問いたい。私はそれほど必要はないと思ふ。当然のことながら、文法の理解が作品を読解、鑑賞をする上で非常に大切であることを十分に承知した上で言っているのだが。それはなぜか。もっと生徒の実態を考えてほしいのである。我々は、国文学専攻の生徒を相手に授業を行なっているわけではない。国語の教師ですら、大学で近代文学を専攻して来た方の中には、古典文法についての正確な知識を持たれていない方もあると思ふのだが。(私などは、「形容動詞」という品詞の存在や下一段活用の動詞については疑問を持っているので、教えることに自己矛盾を感じている。)私は、「全く教える必要がない」とは言うつもりはない、作品を読み進める上で必要に応じて、最小限度は教えるべきだと思う。ここで言いたいのはあくまでも「必要に応じて」ということである。現在の状況では、あまりにも教師の方が「古典文法を教える」ことにとらわれすぎていると思ふのだが。本来「文法」は作品を読む上での手段にすぎない。しかし、「文法」を教えること自体が目的化しているのが現実だと言えないか。多分「受験」が足かせになっているのだろう。そろそろ幻想を捨ててほしい。

もっと「古典」の授業を通して教えるべきことがあると思ふ。生徒の実態を見れば自然にそれが発見できるはずではないだ

ろうか。「古典文法」を教える以前に、「古典作品を読む楽しさ」を教えるべきだと思う。更には、作品のもつ味わい、そこに展開されるドラマや思想を教えるべきだと思う。そして、そこに生きている人間の姿を感じさせることができたらずばらしいことだと思う。「読むこと」に興味を持ち始めたら、生徒にも「文法」の必要性がわかるようになると思う。

この年の教材は「徒然草」「方丈記」を中心に授業を展開したが、比較的多くの作品に触れることができたと思う。ただ、思想性が強い章段では理解度が低かった。生徒は「具体から抽象へ」という思考上の操作が非常に苦手である。「万葉集」では、歌の数を絞り、歌を通して歌人の人物像を読みとり、考えさせることに主眼を置いた。(一時間に一人の歌人を原則に)これは、授業展開上で、学習のポイントが明確になった利点はあるが、生徒の「歴史的知識」の欠如が理解の上で大きな障害になっている。漢文では、三学期に「鴻門之会」を扱ったが時間数の不足から、中途半端の形で終わったのが大きな反省点である。これは「論語」や「孟子」を省いても教えるべき価値がある作品であると思う。それに、ストーリーを重視して、「鴻門之会」「四面楚歌」「項羽の死」と通して読ませること(途中は省略してもよい)が大切であり、それができなければ意味がないのである。ただし、生徒は、登場人物の名がなかなか覚えられず、ストーリーを追う上で難儀をしていたようだった。(最初の授業では、「楚」「漢」に分けて黒板に整理して説明し、本文の人名には線を引くように指導をしたが。)

改めて、入門期の指導の重要さを考えさせられた一年であった。

(二) 58年度(一年生)の実践
国語I 5単位(古典は2単位)

(19)	1 学 期 (18)	
漢文(10) (教科書の入門 教材)	(8)	「亀山殿の水車」(4) (徒然草 51段) 「百人一首」(七首)(4) 「かぐや姫の昇天」(2) (竹取物語)
<ul style="list-style-type: none"> 漢文とは、訓読について。 。返り点について。(レ点、一・二点、上下点) 	<ul style="list-style-type: none"> 。動詞の活用。 。活用とは、活用形について。 。四段・ナ変・ラ変 。上・上二段 。下・下二段 。カ変・サ変 。活用の見分け方。 。本文の訳。 	<ul style="list-style-type: none"> 。オリエンテーション。(勉強の方法。ノートの書き方) 。全文を書写させる。 。五十音図。いろは歌。歴史的仮名遣い。 。和歌についての解説。通読。 。まず通読し、それから状況の説明。鑑賞。 。文法(品詞)について。動詞の説明(本文より動詞を抜き出す。↓作業)

3 学 期 (14)	2 学 期
<p data-bbox="589 213 614 336">「徒然草」(10)</p> <p data-bbox="384 213 409 368">唐詩(四編)(4)</p> <p data-bbox="309 432 685 762"> <ul style="list-style-type: none"> 。書き下し文について。↓「小テスト」 。格言の読みと訳。 。「矛盾」 。「借虎威」「朝三暮四」 。「祇園精舎」 。「無常」につい 。「ゆく川の流れ」 。「十千・十二支」について(↓正月にちなみ) 。文学史的説明。(中世について) 。形容詞・形容動詞の活用 。序段「つれづれなるままに」 。三十二段「九月二十日のころ」 。「名を聞くより」 。九十二段「ある人弓射ることを習ふに」 。絶句「絶句」「送元二使安西」 。「江雪」 。律詩「春望」 </p>	<p data-bbox="774 213 800 336">(3)</p> <p data-bbox="710 213 736 357">「平家物語」(3)</p> <p data-bbox="710 213 736 336">「方丈記」(3)</p>

注、()は時間数。

一年生は、古典が週二時間という制約があり、教えにくい面もあったが、前年の経験から授業の展開については、かなり工夫ができたと思っている。(生徒の実態がかなり見えてきたことは大

きな強みであった。)

ただし、教材の選び方について大いに問題があった。私自身としても反省すべき点が多く残っているが、ここに現在の古典教育が抱える問題があるような気がする。前の表を一見してわかるように、どの作品も取り扱い方が中途半端であり、作品の紹介程度にとどまっている。比較的まとまって取り上げたのは「徒然草」だけにすぎない。これは入門期にいろいろな作品に触れることを通して「古文に慣れさせる」という趣旨に基づいてのことだが、教師側には「これだけは、一年の時に教えておきたい」という強い気持ちがある。しかし、このような細切れの作品の寄せ集めを学び、生徒は果して「古典を読んだ」という実感を持てるのだろうか。この点私は疑問を覚えている。これでは、古典の作品を生徒に知識として与えているにすぎない。「知識として与える」ということは、やはり教師側からの「大切だから覚えておけ」式の強制を意味していると言える。これでは、少しも「古文に慣れる」ことにはならず、生徒の古典に対する興味は生まれて来まい。第一、「祇園精舎」や「ゆく川の流れ」は作品の冒頭部分で思想性が強く、入門期の教材として適切かどうか甚だ疑問がある。更に、二学期の後半に「祇園精舎」と「ゆく川の流れ」を、しかも二つを並べて配置して教える意味は何なのか。私は、この教材の選択の方法は、教師が年間を見通した上で教材指導を行っていないことを如実に示していると思う。実に安易な配列だ。(この点については、共通テストの弊害が明確に現われている。この学年の古典は五人で教えていたが、それぞれ教育観や経験に違いが

あり、なかなか教材が決まらない。そのため、とりあえず教科書順ということになる。今後早急に解決しなければならぬ本校の課題である。

まず、何故「平家物語」を採り上げるのに「祇園精舎」なのか。また「方丈記」の場合には、なぜ「ゆく川の流れ」なのか。その点教師自身、自己へ問いかげがなされていたのか。甚だ疑問だ。「平家物語」は、言わずと知れた軍記物である。なぜ合戦を教えないのか。教材としては長い、難しいとよく言われるが、私はそうは思わない。それから「方丈記」ならば、折角、現国で「羅生門」を教えたのだから、その背景を考える上で「養和の飢饉」を教えるべきではないか。生徒の関心もひくであろうに。次に、何故「祇園精舎」と「ゆく川の流れ」を並べて教えるのか。一体、ここで何を教えるか。「中世」という時代とそこに流れる「無常観」という思想ということになる。う。まさか、対句を教えることが主眼ではあるまい。しかし、入門教材を終えたばかりの生徒に、果して抽象的な観念である「無常観」を教える必要はあるのだろうか、また充分に理解ができるのであろうか、考えてみれば明らかだ。否である。

つまり、このような教材の選択は、この二つの教材が、あまりにも有名なので、「せめてこれぐらい教えなければ」という教師側の一種の義務感に基づいてなされていると思う。言いかえれば、教えないと不安なのだろう。これも「受験幻想」に支配されているためだと思う。「現実」に目を向けてほしいものだ。

さらに、「有名な教材は無難だから」という考え方もあるよう

だが、この考えは、教師自らの勉強不足を露呈していることになりはしないか。そこには、「その作品を通して、何を教えるか」という問いかけはない。したがって、教師の「これを教えたい」という内的欲求に基づく授業がそこに創造されることは難しいだろう。結局その「作品を教える」ことに終始し、そこからは何も生まれてこないであろう。ここに、教師側に思いあがりがあるのではないだろうか。生徒の実態に対する認識が明らかに欠如している。

ここで生徒に目を向けて考えてみると、入門教材を終えたばかりの生徒には、次に比較的まとまった教材を通して、さらに古典を読む楽しさを教えることが必要なことは明らかであり、実際のところ、生徒もそれを期待している。だが現実には、その期待ははかなく裏切られてしまう。そして、その失望は「古典はつまらない」という固定観念を生み出し、生徒の「古典」に対する拒否反応は強くなる。その結果、生徒はますます「自発的に読む」行為から遠ざかっていくのである。

私達は、この年、「祇園精舎」ではなく、他の、ストーリー性があり、比較的短かく、内容的にも完結性を持ち生徒が興味を持てるような作品を配置すべきだった。その作品としては、説話（滑稽譚や恋愛譚など）や「伊勢物語」や「平家物語」の合戦の場面などが適当だと思っている。

教材の重要性を考えさせられた一年間であった。

四、まとめ

国語の教師として大切なのは、「生徒が自発的に文章を読む」ように指導をすることだろう。そのためには、まず生徒に「読む楽しさ」を教えなくてはならない。これは、「古典」について特に重要である。

「古典」は、高校になって生徒が初めて出会う科目である。

「古典嫌い」の生徒を作らないためにも、教師は、一年生の時の指導を重要視する必要がある。特に「教材」については慎重に選ぶべきである。「古典」を読む上で教材の果たす役割は実に大きく、「教材がすべて」と言ってもよい。

更に、生徒の学習意欲をひき出すためには、生徒に「わかる喜び」を与えることが大事なことだ。そのためには、教師は、「受験幻想」とらわれることなく、生徒の実態を把握して、見通しを持った授業を展開しなければならない。そして、「自分は教えるのか」という自己への問いかけを絶えず繰り返すべきだと思う。

以上、かなり一人よがりなことばかり述べてきたが、不備な部分については若輩の不見識とご笑覧いただき、ご助言、ご指導をいただければと願う次第である。

(神奈川県立川崎南高等学校)